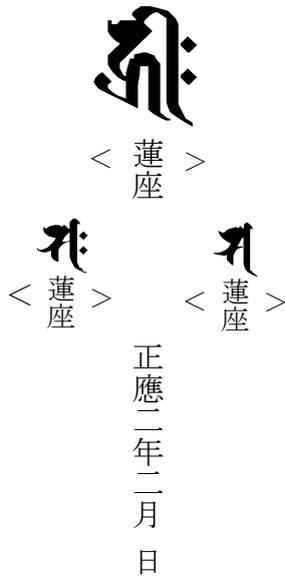


金光院板碑について

早川 正司

緑泥片岩を材石に用いる典型的な武蔵板碑の一例である。かなりの損傷が認められ剥離が進行するものの、身部等主要部分の遺存状況は比較的良好といえる。紀年銘を伴うことから、同時代における基準作例としての評価も大きい。

細部に視点を移すと、頂部の山形にする部分や下端の根部は欠損し形状を成さない。楔形の二段の切込み（二条線）は判然とするが、一方で額部の表現はないため下端までが平面的に彫成される。身部には周囲に枠線が施され、その内面には阿弥陀三尊種子と年紀が刻まれている。刻銘は次のとおりである。



上部に阿弥陀如来の種子キリークを一際大きく表現し、その下左右に脇侍である観音・勢至の種子サ・サクを配し阿弥陀三尊を構成する。いずれ

も葉研彫で、縦長の豪快かつ伸びやかな字形は見事で、ここに時代相を見る。また種子の下には各々蓮座が配され、蓮弁の表現や楕円形の蓮肉の形状からもまさに時代相が見て取れる。三尊種子の下方中央部には、「正應二年二月日」の紀年銘が草書体で刻まれている。正應二年は西暦で一二八九年、鎌倉時代の後期に位置付けられる。上述したとおり、各部位の特徴は正應の年紀と符合し違和感はない。従ってこの年この月の造立と断じて過誤はないものと考ええる。

残念ながら法名や施主名などのサブ情報が刻まれないため、人物名やその趣意を特定することができない。しかし年代的にも古く、金光院と原胤清の伝承などを複合すると、千葉氏所縁の石造物である可能性も考えられよう。情報量の少ない背景を考える時、往時の信仰概念から、没故した縁者の極楽浄土への再生を真摯に願ったものと想定できる。現世の、つまり浮世の一切を消去することを意識した表れと捉えることもできよう。極めてシンプルな内容とその表現こそが、時代相の反映とも理解できるのである。現実的にも、初期の供養塔類（板碑を含めた）には情報量の希薄なものが多い。

本板碑は千葉市域における現時点での在銘最古例であり、同時に数少ない鎌倉期の遺存例である。規模的にも高さ一一四・五センチ（残存高）、幅三六・二センチを計測し、武石町真蔵院板碑（永仁二年在銘）の二三七センチに次ぐ規模を誇っている。造形的にも優れ、石大工の彫技についても評価されよう。年紀を伴い、年代比定上の基準作例として重要である。千葉市に伝世する貴重な石造文化財として、保護・保存の手を加え後世に伝えることが求められる。

本板碑の価値観を、行政・研究者、そして市民の三者が共有することこそ急務と考えるが如何であろうか。

